
女王陛下は浮遊霊？

山崎空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女王陛下は浮遊霊？

【Nコード】

N0170R

【作者名】

山崎空

【あらすじ】

気がついたら浮遊霊になっていた女王陛下。どうやら結婚初夜に殺されてしまったらしい。死んで世界が開けた女王陛下の浮遊霊ライフは意外と快適？ まったり適当異世界ファンタジー…？色々適当ご都合主義です。一応のR15ですがどうなる事やら。

01・楽しい浮遊霊生活

思えば、自分が死んだ瞬間の事を覚えている人間も珍しい。

しかも意味もなくふわふわと空中に漂う今の状況は、いわゆる浮遊霊というヤツだろうか。

この世に未練などないと思っていただけに、なかなか新鮮な状況である。…死んではいるが。

世界中を探しても、新婚初夜に自分の夫君となった相手に殺された人間は少ないだろう。刺されるほど憎まれているとはついぞ知らなかった。死んで初めて気がつくというのも滑稽だ。

相手のことはそこそこ理解していたつもりだったが、つもりだけだった。本当になんとまあ滑稽な人生だった事。

何か人に恨まれるような事をした覚えはないが、覚えがないだけで何かやっていたのかもしれない。先代の王が行った侵略で、直接的ではない恨みなぞ山ほどあっただろう。

だから王になどなりたくなかったというのに、自分の意見をさっくり無視して女王に祭り上げた臣下達が恨めしい。女王は不吉だからやめておくと、あれほど言ったのに。そんなに弟が成長するのを待てなかったのだろうかあいつらは。

あげく自分達が選抜して娶わせた婿が、王であった私を殺したのだ。やつらの目は節穴と断言してもいいだろう。

会った時からつくづく考えが読めない男だと思っていたが、まさか殺されるほど憎まれていたと予想外だった。うん、まったく興味がもてなかった生前が嘘のように興味深い。

王族の結婚に恋愛感情など期待していなかったが、あれの事は別に嫌いではなかった。興味はもてなかったが。

見目も悪くなかったし、あのクソジジイどもが選抜した割には私に対して色々口うるさくなかった。

性格は、考えが読めなさそうな腹黒男だと会った時から思っていたが、まさか内にどすぐらい憎しみを秘めた熱い男だったとは意外だった。あの冷酷そうな男の内面がそんなに熱くどろどろとした熱に満たされてるなんて誰が思うだろうか。

予想外すぎて少しときめいてしまった。

そうかこれがギャップ萌えと言うやつだな。うん、ようやく女官達の言葉を理解できたぞ。死んでからだがな。

しかし死んでからの初恋というのも、世界広しと言えども私だけだろう。

さて、見事しぶとく意識の残った浮遊霊となった私は、何をすることもなく自分の国の空をふよふよ漂っていた。

王都で少し小耳に挟んだ事によると、どうやら私は重い病で倒れた事になってるらしい。

おや、この通り死んでるといふのになんという悪あがき。

今国を取り仕切ってるのはあのクソジジイ共と、私を手にかけて夫君だそう。まったく罪に問われてないところを見ると、上手い具合に誤魔化したか、最初からジジイどもも暗殺のゲルか。

そうなると残された弟が心配だが、まあ今の私に助けてやる事は出来ない。あれももう九歳だ。修羅場ぐらい自分で切り抜けるだろう。抜けられなかったらあれだ、諦めるほかない。

と言いつつもやっぱり心配だったから、私は国の隅々までふよふよ漂い見て回った後に城に戻ってみた。

なにせ生きてる頃は城の中から出られなかったのだ。この機会を逃すのはおしい。お仲間さんとは何人か会ったし、おかげで幽霊友達もできた。

先代王の時代に戦場となった、辺境近くの荒地はなかなか壮観だった。

血を吸い過ぎた為か、土地が穢れきつて死んだ兵士の魂をがっちり掴んで離さないでいた。死んでもなお輪廻の輪に戻れずもかく兵士の霊がうごめいていて、そういったやつらは大概正気がなく、運悪く通りがかる生者に襲い掛かつては殺している。

そういえば死ぬ前にみた嘆願書で、荒地をどうにかしてくれというのを見たな。

神殿の連中ならどうにかできるはずだが、金にがめついやつらの事だ、国が申請しなければ動くわけがない。

仕方ないから途中まで手続きをしていたが、私が死んだ事で白紙に戻っただろう。

あそこまで穢れきつた土地と悪霊となると、かり出される人間も上の方の人間になるだろうし、そうなると国から出る金も大きくなる。金にがめつい一部の人間が申請をもみ消した可能性もある。

仮にも神に仕えるならただで清めてくれてもいいと思うのだが。

まあ死んだわたしがあれこれ考えても仕方ない。

死んでから久々に戻ってきた城内は、まあ当たり前だが変わってなかった。こつそりサボって逢引してる女官やら兵士やら高官やらを発見しても、気づかれないのはなかなかいい。浮遊霊というのもなってみればいいものだ。生きてる人間は誰も気が付かないが、同じようなお仲間が時々声をかけてくれるから寂しくもない。寝る必

要もないし腹も減らない。疲れる事もない。空を飛べるし壁はすり抜ける。至れり尽くせりだ。

どうやら私は浮遊霊が性にあってるらしい。

人間として生きていた頃より、ずっとこっちの方がいい。楽で楽ではない。

さて弟はどこにいるだろうか、彼の部屋へ言ってみたがもぬけの殻だった。今の時間は勉強の時間だったか。そうすると部屋にいないのは当然か。それとも私の子供時代のように、勉強から逃げて中庭で遊んでいるだろうか。…あの子は真面目な子だから、そういう事はなさそうだが。

中庭なら少し前に通ったが、弟の姿は見えなかった。

さてさて困った。

城に戻ってきたのは弟を見るためだったと言うのに。肝心の目標が見つけれないとは。

もう少し彷徨ってみるか、するする壁や天井を抜けて城内を漂っていたら、意外な部屋で意外な人物と一緒にいる弟を見つけた。

場所は執務室だ。私が生前使っていた部屋に間違いない。

主を失くしたその部屋には、今新たな主がいた。他でもない我が夫君殿だ。相変わらず冴え冴えとした容姿のその男の前に、見慣れたふわふわの髪の少年。

間違いない弟だ。たった一人の私の家族。

弟は手に花束を持っていた。といつてもちゃんと作られたものではなく、花園から適当につまめたのだろう、長さが不ぞろいな上花もバラバラだ。

ただ色だけが統一された花束は、私の好きな黄色だった。

「義兄上、姉上にはまだあわせてもらえないのですか」

幼い弟がそう言う。

残念ながら弟よ、私はもう死んでるから会えないよ。

執務室の天井近くでその光景を眺めながら、私は夫君となった男の顔を見た。相変わらず考えが読めないだろうと思っていたその顔には、予想外に感情の色があった。

僅かに眉をよせ、苦しそうに見えるその表情は、なるほど、見ようによつては妻であった私を心配しているようにも見える。

うむ、お前がそんなに演技派だったとは知らなかった。
ますます興味が湧いてきたぞ。もう死んでるがな。

「ザイラ殿下、残念ですが…」

夫君はそう言って沈痛そうにうつむいた。

生前そんな表情一度だつて見たことがない。いつもあの男は笑っているか無表情かのどちらかだ。

演技派すぎる。男優にでもなったほうが良かったんじゃないだろうか。

弟はその返答にシユンと肩を下げて、手に持っていた花束を夫君に預けて部屋から出て行った。うつむ流石は我が弟、気落ちしてる姿も可愛いぞ。姉上が触れられる状態だったらぐりぐりと撫でてやりたいほどだ。

そう思いながら弟の背中を見送ると、扉が閉まった途端執務室の新たな主の雰囲気は一変した。

沈痛そうな表情は一気になりを潜め、まるで仮面を被ったかのようにならなくなる。私の良く知る表情の一つだ。

その変わり身の早さにも脱帽だ。

夫君は手に持っていた不ぞろいの花束を、そのまま机の横のゴミ箱に投げ捨てた。

おいこら貴様っ、人の弟が手ずからつんできてくれた花をゴミ扱にするな！

つまれた花もかわいそうだろうが！

私の抗議など聞こえるはずもなく、夫君は何事もなかったかのようになりに戻る。

そのあまりにもいつものおりの姿に、私は知らずふっと息をはく。…といつても浮遊霊の私は実際呼吸なんぞしてないので、あくまでそんな仕草をしただけだ。

私を殺した事に、何の後悔もつかげないその姿がいつそすがすがしい。

そうか、お前はそんなに私を殺したかったんだな。

そんなに恨まれる事とはなんだったのだろうと、今更ながらに疑問に思った。

02・分からない事、気がついた事

あつという間に良く知る姿に戻った男なんぞ観察してもちっとも面白くないので、私は弟を追うことにした。

多分一旦部屋に戻るだろうとふんで、壁をすり抜け見つけた背中を追う。

私という唯一の家族を失った小さい肩がとても愛しい。

私がただの浮遊霊ではなく、何か力を持つ事が出来た存在なら、こんな姿になってもお前を守り、そばにいる事が出来ただろうに。

ザイラギーニ。

私の大事な弟よ。せめてお前だけは殺されないように、私は祈る事しか出来ない。

あの男の憎しみの標的に、弟が含まれなければいいのにと思う。

もしも先代がらみで王族自体を憎んでいると言うなら、それも儂い希望でしかない。

先代の王は、父上は。

戦争を好む人だった。戦争狂だと言ってもいい。

初めて人を殺したのは十四の時で、それ以来肉を断ち切る感触と、血の雨が忘れられないのだと昔聞いた事がある。

たった六歳の子供になんていう昔話をしやがると今さらながらに思うのだが、当時は童話調に語られるその話が、どれほど物騒なものかは分からなかった。

ただその話をする時の、父上の恍惚とした表情が幼心に怖いと思っただのが、多分最初の恐怖だった。

軍事力にばかり予算を割いて、国の治水に関してはまったく無關心。

母上が病気で亡くなられてからそれはさらに酷くなった。時々、アレは自分の親ではないとすら思った。それほどまでに怖かった。実の父が。けれど優しい記憶があったか嫌悪しきれなかった。

国が荒れなかったのは、クソジジイどもが狡猾に父上をだまらかしながら頑張ったおかげだ。

その点私はあれらを尊敬している。

伊達に長く生きていないわけだ。

侵略を繰り返して隣国を焼いたのはほかならぬ父だ。

当時の隣国の王と王妃、そして小さかった王子達の首を残らずはねた。

戦利品だと王妃の首飾りを渡された時には、気持ち悪くて倒れそうになった。

子供である私や弟にはそれなりに優しい父だったが、あの人からは血の匂いしかなかった。表面上は受け取ったものの、死者からそれを剥ぎ取ってきた父に反発して、ジジイどもに秘密裏に隣国に戻してもらった。

父上は自国の民でも、自分に反発する人間には容赦がなかった。だから、まあ暗殺されたのは自業自得といえよう。

計画したのは父上に反発する高官と、ジジイ共　　そして私だ。

後悔はしていない。

ジジイ共は父上と一緒に、至福を肥やしすぎた高官連中も始末した。

そして表向きは病死と発表し、反論する間もなく私を女王の座につけた。

傀儡王にでもするつもりかと思つたら、どいつも率先して仕事をまわしやがる。王なんだから馬車馬のように働けと、父には言えなかつただろう言葉を平気で投げてくる。まったくだから長く生きたクソジジイどもは嫌いなんだ。

お前達の誰かが国を統治すればいいじゃないかといつたら一晩かけて怒られた。王族がいるのに何でそんな面倒な地位につかねばならんと面と向かつて言われた女王など、私ぐらいだ。

死んでしまつた今では、あの書類に囲まれた執務室が遠い。

これからは我が夫君殿がかわつてあれを対処するのだ。うむ、いい気味だ。

さてわが弟は部屋には戻らず、どうやら中庭へと足を運んでいるようだった。中庭の噴水、その真ん中に立っている女神の像の前で止まると、弟は両手を合わせて祈り始めた。

言葉には何一つださないので、何を祈ってるのはわからない。

でもその姿が健気でますます抱きしめたくなった。

この姿は楽だが、弟を抱きしめられない、その一点において不便だ。

両手を固くあわせ、熱心に祈るザイラに、通路の方から声がかかった。弟に合わせるようにそちらをみると、教育係の男が走ってくる。

る。

「殿下、またこちらにいらっしやっただのですか。先生が先ほどからお待ちですよ」

「ナーガス、だって姉上がちつともよくならないんだ。女神さまなら、きつと姉上を助けてくるもの」

「大丈夫ですよ。陛下にはラキ殿が付いてらっしやいます。宰相の方々も手を尽くしてくださってます。必ず、必ずよくなりますとも」

悪いが二人共、死んでるんだから良くなりようもないだろう。

だいたい他でもないラキが私を殺したんだ、当てにするだけ無駄だろう。ジジイ共などもってのほかだ。

私の姿が見えないのをいい事に、二人の傍でそう呟いてみる。

教育係の言葉に頷きながらも消沈したままの弟の頭を、触れられないけれど撫でた。

途端、ザイラの顔がぱつと持ち上がって私を正確に見た。

ぎょつとして手を離しその場から飛びのくと、ザイラは瞬きを繰り返して視線を彷徨わせた。まるで、私の姿を探すように。

「ザイラギーニ殿下？ どうかなさいましたか？」

「……今、姉上が……ううん、なんでも、ない」

そういいながらまた、私の姿を見つけるように視線が動く。

うむ？ 今もしかしなくてもザイラに見られたのか？

触れた相手には私の姿が見えるのか？ だとするとそれはなかなか面白い発見だ。

これは、なかなか遊べるかもしれない。
私は思わず、にんまりとした笑みを浮かべた。

03・陛下の悪戯

女王陛下は、実はもう亡くなられているのではないか。その噂は城内に、そして王都に真しやかに流れ始めた。

女官達が、詰め所でそう話し合う様をすぐ傍で眺めつつ、私はにやりと笑った。

自分が触れた生者は、僅かな間この姿を目に映す事が出来る。早い話がお手軽に幽霊を見れるようになるのだ。

どういう理屈かは知らない。そもそも考えるつもりもない。だがこの発見は私の悪戯心を大いに刺激した。

ちなみにどのぐらいはつきり見えるかは個人差がある。

ぼやけた白い影だとしか認識できないのもいるし、私の顔まではつきりと分かる者もいる。

けれど何も感じない、見えないという人間は今まで一人もいなかった。

につこり笑って悲鳴をあげられた時の、爽快な気分といったらしい。

顔を良く知る連中はざつくりと避けて、城の下っ端連中相手に片っ端からそれを試した結果、「白い影が厨房に」とか「城には若い女の幽霊が出る」とか「幽霊は病で臥せってるはずの女王陛下に瓜二つらしい」等等という話が流れはじめ、目撃者が増えるに従って真実味を帯びていった。

そしてついに、「女王陛下は暗殺されたのでは」という話に変わった。

別に自分が死んでることをアピールしようと思ったわけではないが、結果的にそうなった。

ちよつとした悪戯が大事になるといい例かもしれない。うむ、勉強になった。

死んでから勉強になることばかりだ。

生前より充実してる日々を送ってる気がする。

幽霊がでると噂話するには問題ないが、実際自分が目撃者となると、男も女も腰を抜かして泡を吹く。幽霊という存在はそんなに精神的に恐怖らしい。

屈強な兵士ですら尻尾を巻いて持ち場から逃げ出したし、なかなか普段見れない意外な一面が見れてよらしい。女官達なんぞ悲鳴をあげてあっさり気を失ったしな。うん、あの大音量の悲鳴には私の方が逆にびっくりした。

私に体があつたらしばらく耳が聞こえなかったかもしれない。本当に凄かった。

あんまり脅して仕事を辞められてもアレなので、最近是非常におとなしくしている、つもりだ。

だというのに噂話は消えない。噂話はどこまる所を知らず、ラキが私を殺して王位を篡奪したのではないかという、妙に確信をついた話にまで変化した。

その噂を聞いてから、試しに夫君の顔を見にいったが、話を知らぬのか気にしてないのか、いつも変わらぬ無表情。もくもくと政務をこなしていた。

彼の身分は相変わらず女王の夫、ではあるが「王」ではない。五

人いる宰相の末席のままだ。

王になるために動いてる気配もなければ、国をどうしようとしてるわけでもない。

ザイラに対しても態度はかわらず、命を狙ってるふうもない。女の影すら、ない。

では何故私を殺したのか。

それだけが変わらず疑問のままだ。

婚約者として連れてこられた時から、そこそこ義務的に会話はしたし行事にも一緒に参加をした。それほど気に触る事をしたような記憶は思い返しても見当たらない。

まったくもって謎だ。

じーっとしばらくラキの姿を眺めていたが、答えわからず見るのも飽きた。

弟の愛らしい姿でも見て癒されてこようと執務室を後にする。

最近ザイラは頻繁に授業を抜け出して城中を駆け回っている。

それがどれも、私が悪戯をした箇所なのが妙に気になる。

ザイラに悲鳴をあげられて逃げられたらちよつとシヨックなので、最初の不意打ち以降は弟に触れないよう細心の注意を払ったと言うのに。

もしかしたら、彼は会いたいのだろうか。

幽霊であるこの私に。

04・愛しい家族

教育係が止めるのも聞かず、弟は私が最後に悪戯した城の東館の回廊へきていた。

「どうやらまた授業をさぼったらしい。うつむ、先生には悪いことをした。」

本来は授業をサボったりするような子ではないのだが、真面目で素直で本当にいい子なのだ、私と違って。

「殿下、もうお止め下さい。陛下の幽霊など、そんな女官達の噂話を真にうけて頂いては困ります！」

「でもナーガス、見たのは一人や二人じゃないんだ。僕だって、僕だって姉上は病に臥せられているだけと思いたいけど…。それだって嫌なのに…っ」

「殿下……」

「……この目で見ないとどうとは言えない。義兄上が嘘をおっしゃられているのかもしれない」

「殿下！ ラキ様をお疑いでいらっしやるのですか？！ あの御方は執務の合間をぬって陛下に付き添っておられますのに！」

教育係の悲鳴のような反論に、ザイラは普段の彼から想像できないほど険しい顔で負けじと叫んだ。

「だって姉上に実際会ってるのは、義兄上だけなんだ。一の宰相ですら、会わせてもらえないと言っ。姉上付きの女官達も、女官長も！」

そうか。ラキが平気でいられるのは私が死んだ事を外に漏らして

ないせいか。…にしても、ラキごときにあの老獪なジジイ共を止められるとは思えない。だとしたらやはり、ジジ共も一枚噛んでるの
だろう。

ラキを含めた五人の宰相は、私がいなければ事実上この国のトップだ。彼らが口裏合わせて周りを丸め込めば、私の死が弟にすらばれないのは頷ける。

「姉上に会いたいつ」

こらザイラ。男がそんなに簡単に泣くものではないぞ。

くしゃりと顔をゆがめた弟に、教育係は慌てたように駆け寄る。いくらしつかりして見えても九歳だ。

母代わりでもあった私と、急に離されたから寂しいのだろう。

ああこらっ、そんなに目をこすってはダメだ、赤くなるだろう。

私はここにいる、だから泣くなザイラギーニ。

弟に関して、私の自制心と言うのはとんときかなくなる。それは生前も一緒だった。所詮ブラコンだ。何とでも言う方がいい。

思わず伸ばした手が、物をすり抜けてしまっ手がザイラの髪に触れた。

母上とそっくりのふわふわの髪。感触を得られないのは残念だ。

当然のようにすり抜ける自分の手に苦笑しながら、泣きじゃくる弟の頭を数度撫でた。

するとザイラはふっと顔を上げて、いつぞやの中庭のように確かに私に視線をあわせた。

涙で歪んでいた目が、はっと強張るのを見て「しまった」と思ったが、既に遅い。

今更手を離して飛びのいてもこの目は自分を追うだろう。驚愕に見開かれた目は怯えの色を見せていない。かわりにじわりとうかんできたのは、求める目だ。

「あね、う、え……」

「殿下？」

ナーガスには触れていないから、彼に私の姿は見えない。

かすれた声で呟いたまま、微動だにしない弟に私は微笑みかけた。

さて、今までの悪戯で私の声まで聞いた人間はいないが、はたして幽霊の声なぞ生者に聞こえるのか。

実験もかねて口を開いた。

泣くのはお止めザイラ。男の子だろうか？

笑って、弟の頭から手を離れた。

程なくして彼の視界から私の姿は消えるだろう。実際は変わらずたたずんでいるわけだが、こちらから触れていないと生者は私の姿を見てられない。靈感とやらが強い人間は別らしいと、他所で会った幽霊仲間は言っていたけど。

「っ、姉上っ！ 待ってっ……！」

悲鳴のような声でザイラは私に手を伸ばした。けれどその姿は私の体をただすり抜け、その目がこの姿を見失った事を悟る。

「で、殿下?! 急にどうされたのですか?!」

姉恋しさについに幻覚まで作り出したかとも言い出しそうなナ
ーガスをほったらかしにし、ザイラはぐっと涙を拭くと顔を上げた。
もう泣いていない事に安心するも、何か強い決意が宿るその目に首
をかしげる。

弟はそのまま、ナーガスの声にも応じず走り出した。仰天したの
は教育係だけではなく、私もだった。

「殿下っ！！？ お待ち下さいっ、どちらへいらっしやるおつもり
ですかっ！ 殿下！！」

子供とは思えぬ速さでかけていく弟を追う教育係。私の悪戯被害
を今回一番被ってるのは間違いなく彼だろう。うむ、すまんナ
ーガス。

せめてもの罪滅ぼしに、私も一緒に追ってやろうじゃないか。

05・避けていた場所

「義兄上!!!」

バン、とそれはもう勢い良く、ザイラは執務室の扉をこじ開けた。扉の両脇に控えていた兵士の「お待ち下さいっ」という制止の声も見事に振り切って執務室に乱入した我が弟に流石のラキも驚いたのか、ぱつと書類から顔を上げて目を見開いた。

「ザイラ殿下、一体どうされたのですか？」

普段大人しいザイラだからこそ、この乱入は効果的だった。異常な気配を悟ったラキが立ち上がり、咎める事もせずにザイラの話の聞く体制に入った。

「姉上に会わせてくださいっ!!!」

「……殿下、ですから陛下はいまだ」

「本当に姉上はご病気なのですか?!」

いつものように宥めの体制にはいったラキは、その言葉にすっと目を細めた。しかしそれも束の間、すぐに困惑したような表情に戻る。

…ほんっつとくに演技派だなお前。

私は心の底からの称賛をかつての夫に送る。

「…本当は、姉上はもう、亡くなられたのではないのですか?!」

「…殿下、そのような不吉な事を仰られては困ります。まさか、女官達の口さがない噂話をお聞きになられたのですか？」

「……姉上に会いました」

急に勢いがしぼんだように、いっそ静かな声でザイラが唐突にそうつぶやいた。

「……ザイラ殿下？」

「先ほど、姉上にあつたのです。僕は、僕の、あ、頭を撫でてくださってっ、な、泣くなと、泣くなと仰ってっ」

半透明の姉上は、そのまま消えてしまったっ！

言葉の途中から既に涙声だったせいか、最後の辺りは既に悲鳴に近かった。

うーむ、別に消えたわけではなく、お前の目に映らなくなっただけなんだがなザイラよ。

さっきせつかく泣き止んだと言うのに、また泣いてしまったのか。また頭を撫でてやるわけにもいかんしなあ。さて、どうするべきか。

そう考えるまでもなく、この場にラキがいる以上私は大人しく傍観者を決め込むしかない。

「ほ、本当っの、こと、を、言うてくださいっ！！ あ、姉上はっ、もう……っ」

「ザイラ殿下！」

ザイラが最後まで言うことなく、ラキの底冷えするような低い声はその先を押し留めた。困惑していたその表情は一転し、ただ感情の色が消えた顔だけが残る。

ここまで表情が抜けたラキを見るのは初めてなのだろう、ザイラは少し怯えたように一歩後ずさった。

「めったな事を口になさらないでください。陛下は生きておられます」

凍るような声は、ともすれば静かに怒っているようにも聞こえた。

「でもっ！！」

ザイラの反論をラキは次の言葉で封じ込める。

「私の言葉を信じていただけたいのならば、仕方ありません。陛下の所までご案内いたします。その目でお確かめ下さい」

「っ！！ ほん、とうですかっ?!」

「はい」

おいおいおいおい。

一連の会話をじっと見守っていた私は思わずそう突っ込みを入れた。

この通り立派に死んでいるわけなんだが、本当にいいのか？

まさか死体に防腐処理を施して、寝台に寝かせてるんじゃないやあるまいなお前。

それともあれか？ 私の知らないうちに影武者でも作ってかわりをさせてるのか？

今更ながらに、そういうえば自分の死体がどうなったのかは調べなかったと思ひ出す。

病気で眠っているというからには、恐らく寝室に何かごまかしが

されてるのだろうとは思ったが、まさか死体をそのまま寝かせてるとかは考えなかった。

涙をすっかり引っ込めて、困惑のままにラキの後をついていく。イラの、更にその後を私も追う。

執務室からそれほど離れていない部屋の前まで来ると、ラキは胸元から取り出した鍵を鍵穴に差し込み、ゆっくりと扉を開いた。

そこは間違いなく私の部屋だった。

王位を継いだ後の、私の寝室。どうやら外から新たに鍵をつけた様だ。

ちなみにラキの寝室はちゃんと別にある。

私は初夜の夜に殺されたわけだから、私の寝室イコール殺害現場である。

そう言えば無意識にこの部屋だけ避けてたなあと、今更ながらに認識する。

ラキとザイラを飲み込んだ部屋の扉は、ナーガスや警備の兵士を残して静かに閉じる。

私も、続くように壁をすり抜けて部屋へと入った。

カーテンが締め切られた寝室は、まだ日暮れ前だと言うのに薄暗い。

寝台には薄いカーテンがかけられていて、中に誰がいるのかは伺えない。

「ザイラ殿下」

そのカーテンを掻き分けて、ラキがザイラを手招いた。隙間から見えた誰かの白い肌にはっとする。

誰か……。問うまでもない。

それは私だ。

影武者なんぞではない。

紛れもない、私の体だ。

死人のような青白い肌をした私の体は、固く目を瞑ったまま寝台に横たわっていた。

……いや、死人のようなというか、まさに死人のはずなんだが。

……はず、なんだが。

「あね、うえ」

寝台のすぐ傍に近づいたザイラが、そう吐息をもらした。

その目は恐らく、私と同じ場所を見ているのだろう。横たわ

る私の体の、緩やかに上下する胸を。

……何度見なおしても呼吸してるぞ、私の体。

おいおい、まさか幽霊だと思っていたら、生霊だって落ちなのか？ そうなのか？

それはがっかりだ。あまりにもがっかりだ。がっかり過ぎて思わず床にめり込んでしまうほどだ。やっぱりあれか、体に戻らなきゃだめなのか。

せっかく女王なんぞという厄介な役職から解放されたと思ってい

たのに、私の体は生きている。必然的に今の私は幽霊じゃなく生霊になる。

生霊。うつむなんとも中途半端な存在だ。幽霊のほうが潔く正しい。

がっかりする私とは逆に、ザイラは呼吸する私の体に希望を見らしい。もはやラキの言葉を疑った事すら弟の頭の中には存在しないようにみえた。もう少し疑えと言いたいような、ずっとそのままでいて欲しいような複雑な気分になった。

死んだのではないかという噂をすっかり払拭できたらしいザイラの顔は安堵に満ちていた。

多分、幽霊 いや、生霊状態の私の姿を見たことも記憶から薄れているに違いない。

私が生きているという事実には納得したザイラは、ラキに丁寧に謝罪と礼を言う。それから、ラキに促されて部屋を出て行った。

後に残ったのは、ベットサイドに表情を消して立ち、横たわる私の体を見つめるラキと、生霊状態の私。

てつきりラキもすぐに出て行くと思っていたからそれは予想外だった。

何だラキ。私の顔なんぞ見つめていても面白くあるまい？

さっさと執務にもどれ。油断してるとすぐ仕事が山積みなるぞ。

そんな事を考えつつ、なんとなく出るタイミングを逃した私は、微動だにしないラキを見つめる。

不意に、ふっと息が漏れた。

……他でもない、ラキのため息だ。

寝台に横たわり、硬く目を閉ざす私の顔を見つめ続けるラキの顔は変わらず無表情。

だというのに僅かな苛立ちが見て取れた。

ふっと。

ラキがまたため息をつく。

一度目をつぶり、また開いて、私の顔を見続ける。

お前、一体何がしたいんだ？

そんな私の問いかけが聞こえたわけでもないだろうが、その時実にタイミングよくラキが動いた。

指の背で眠る私の頬を撫で、次いで額と唇となぞるように指を這わせる。

「オルフェリア」

ラキが私の名を呼んだ。

というか今初めて呼ばれたぞ名前。

いつも陛下としか呼ばないから、名前を知らないんじゃないかと思ってたんだが違うのか。

しかも呼び捨て。新鮮だ、新鮮すぎる。

熱がこもらない声は、到底愛おしい相手を呼んだという風ではない。けれど、なぜかその声にすぐるような何かを感じた。

「…いつまで寝てるつもりだ」

ラキがまた、指の背で私の頬をなぞる。

一回、二回、三回。

「いい加減にしろ」

常に丁寧口調を崩さなかった相手の、砕けたというよりは怒った口調。

新鮮な事だらけで頭がパンクしてしまわないか心配だ。

ラキはそのまま、眠る私の顔の横に手を置き、覆いかぶさるように頭を下げ。

06・それはお伽噺のような

唇に感じる感触は、冷たくも硬くもなかった。

むしろ柔らかく、暖かった。

確かに命が通った者のそれ。

生とは温かく、そして少し切ないものだとは初めて知る、瞬間。

なるほど、つまりこういうのがお伽噺のワンパターンというやつか。

急に全ての感覚が戻ってきたことに戸惑いながら独りごちる。あまり嬉しいとも思えないのは、あの状態が自由に楽しかったせいだろう。

眠り続ける姫が、王子の口付けで目が覚める。

今まさにその状況であるというのに、私は酷く冷めた思考でそれを感じていた。

まったく、ぞっとしないモーニングコールだ。

目の前の男ほど、王子という生き物から程遠い者もないだろうに。

そして私ほど、物語の姫に相応しくない者も。

ゆるり、と私は目を開く。

唇は未だラキのそれで塞がれていて、目前には彼の顔がぼんやりと見えた。

睫が長い人間と短い人間がいるというが、大概はつぶると長く見えるものだ。ラキもその類にもれず、細く繊細な睫が頬に影を落していた。

そういえば、とふと思う。

口付けなんぞされたのはこれが初めてではなかるうか？

初夜なんぞ甘さの欠片もないままいきなり刃物が飛び出て刺されたしな。

そうなるのであれば、意外とこれはロマンティックとかいうやつか？

お伽噺の姫のように目覚めの口付けを受けて目が覚める　　うん、そんなものに憧れた事は一度もないが、ときめくかと聞かれれば予想外にときめくかもしれん。

こんな私でも乙女チック街道を突っ走れるものなのかと思うと感慨もひとしお。

と、あれこれ考えているうちにラキの睫がふるりと震え、瞼の奥の強い光が私の目をがっちりと捉えた　　途端。

お伽噺のような優しく、柔らかい口付けはそこで終わった。

後はただ、貪り食らうように口内を蹂躪され、噛み付くような、到底口付けとは呼べないものの嵐。

視線はずっと噛み合ったまま。そらす事など許さないとでも言うように、ラキの瞼は閉じなかった。

長い長い口付けという名の拷問が終わった時、私は声を出すよりも先に大きく息を吸って、はいた。

久しぶりの呼吸は、なんだかすこし苦かった。

「……………仮、にも、怪我人に対する、扱いとは、思えんのだが」

途切れ途切れに言葉を発する様は、見ようによつては立派な病人に見えたかもしれぬ。

ラキは強いまなざしを僅かに弱め、けれど視線はけしてずらさぬまま、私の真上からゆっくりと動いた。

そして、ぼつりと呟く。

「…いつ目を覚ました？」

「……どこぞの、お伽噺のように、お前の口付けでだ」

するとラキは、またぼつりと言った。

「…前にした時は起きなかった」

まてまてまで、お前一体何回人の寝込みを襲ったんだ？ 怒らな
いから正直に話してみろ。

いやその前に、あれか、まさか死体愛好家とか何かなのか？

死んでいる私は生きている私よりも魅力的なのか？ それはそれで何だかシヨックだ。

それともそういう趣味か？！

うるんな目で見つめると、ラキはいつも通りの無表情で………いや、訂正しよう。少し泣き出しそうな顔で、私を見下ろしてきた。
そんな表情は、当たり前だが初めてだった。

何だ、私の初めてづくしはまだ終わってなかったのか。大サービ
ス過ぎるぞ神様。

「…陛下」

「オルフェリア、だ。さっきそう呼んでいただけろう？ 今更陛下等

と呼ぶのはよせ、白々しい」

ただもう一度、名前で呼んでもらいたかった。この目の前の男に（まあ、少し言い方がとげとげしかつたかもしれないが）

それなのにラキは、押し黙った。ぎゅっと唇を噛んで意地でも呼ぶかというように。

どこの駄々をこねる子供だ、いい年をした男が。 とは、口にしなくて正解だったかもしれない。

「…本当は、いつから気がついていたんです？」

「さっき言っただろう。お前の、口付けだ。それ以前は生霊状態で、城や町をふらふらしていた。だから最近の城の様子も、ザイラの事も、お前の事も知ってる」

「……では、女官達の、噂話は」

「幽霊を見たという話なら真実さ。少し脅かすつもりだったのが大事になって正直焦った」

「貴女は…っ」

憤ったようにつぶやきながら、泣きそうな表情は変わらない。なんだか、まるで自分がいじめっ子になったような気分だ。この状態のラキをものすごく可愛いと思った私は、SかMで言うなら間違いなくSだと断言できる。

もしかやこれが、恋は盲目というやつか？ だとするとちょっと面白いな。

出来るなら口調も、先ほどのような砕けたものを希望するんだが、動揺したのが落ち着いてきたのか、ラキの口調はもういつも通りだ。ただ表情だけが違う。

そんなラキに手を伸ばそうとして、体が異様に重たい事に気づく。

何だこれは、まるで重石をつけたみたいだぞ。

「体が、重いんだが何でだと思っ？」

その上だるい。と思ったら体のあちこちが痛くなってきた。

痛いという感覚は久しぶりすぎて、どうにもすぐに対処が出来ない。

「ひと月も寝込んでいれば当たり前です」

「ひと月……」

はて、もうそんなに経ったのか。浮遊霊状態の時は寝る必要がなかったので、朝がこようが夜がこようがお構いなしだったし、いちいち日数も数えなかった。

「そっいえばなんで私は生きてる？」

「……あんな浅い傷で死ぬわけがないでしょう」

「いや、刺された瞬間には意識が落ちたからな。てつきり死んだと思った。お前、私を殺すつもりだったのだろう？ 何故殺さなかった？」

「……………」

ラキの顔から一瞬だけ表情が消えた。

よく知る無表情とも、どこか違う。(でもどこが違うかはうまく言えない)

「……………殺す、つもりはなかった」

ただ、自分が死ぬつもりだった。

ぼつり、ぼつり。

雪が降るように静かに、落ちてきた言葉に私は思わず眉をしかめる。

「それは、あれか。私との結婚が死にたい程嫌だったというわけか……」

ならばそう言えばよかったのだ。私も嫌がる人間と結婚する趣味もない。

ラキを婚約者からはずす事など容易にできたのに。

「違うっ」

しかし苛立った声が私の言葉を否定した。

ラキは再び私の上に覆いかぶさり、その憤りも隠さず強く私を睨んだ。

「…貴女はいつもそうだった」

押し殺すような低い囁きに、彼が怒っている事を知る。だが一体何に？　そもそも、この男は私を憎んでいた。それは、間違いないはずだ。

「いつもそう」「とは、何をさして言っている？」

「…お前は私を憎んでいただろう？」

「ああ、憎んでいた、何よりも、あの宰相達よりも貴女が憎かった

…」

包み隠さぬ、それがラキの本心である事はよくわかった。

何故？

問う前に、答えは告解のように告げられた。

「あの男の娘であるのに、あの男を殺した貴女が心底憎かった」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0170r/>

女王陛下は浮遊霊？

2011年2月28日15時00分発行